

タイの少数民族への対応と現状

片岡樹（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

本講義では、ベトナム山地のムオン族村落への訪問に先立ち、東南アジア大陸部における山地社会・少数民族社会の現状を、主に比較の視座から概説することを試みた。内容は次のとおりである。

1. 東南アジア大陸部の少数民族・その概観

東南アジア大陸部においては、中国、ベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーの各国をまたぐ山地に共通した民族構成がみられる。そこでは盆地部にタイ系民族が居住し、その周辺山地に山地焼畑民が住むというかたちでの民族間の住み分けが行われている。

2. 前近代の民族範疇の特徴

この地域で現在「民族」と呼ばれているものの多くは、前近代においては宗教カテゴリー、課税カテゴリー、身分カテゴリーにすぎなかった。また前近代国際関係のもとでは、国民、民族、国境といった概念が事実上存在せず、そのため今日言われるような意味での「少数民族問題」もまた存在しなかった。

3. 近代国家と民族

19 世紀以降にこの地域は、にわかに近代国家という新しい国際関係のゲームに組み込まれていくことになる。そこでは国境線、国家主権、国民という概念が導入され、それに沿って山岳地域が各国の辺境として分割され、その住民たちは別々の国家の「少数民族」として囲い込まれていった。ここではじめて、東南アジア各国の山地社会が国家によって「少数民族」として見出されるようになる。それ以後の「民族」のあり方は、各国の国家建設のあり方に規定されるようになった。

4. 現代の諸問題（タイ山地民の例）

タイの山地においては、冷戦期の 1950 年代になってようやく、山地民への政策的取り組みが開始された。それは反共政策を遂行する上で辺境の非タイ的分子を監視するという脈絡で生じたものであり、そこからは山地民に対する否定的なステレオタイプが増幅されることになった。現在の山地焼畑民に対する農業改善プロジェクトなどはすべてそうした考えを前提とするものであるが、近年になってそれとは逆に、山地焼畑民を「森と共存する知恵の持ち主」として再評価する運動も一部の NGO などによって進められている。

（記録：片岡樹）